



2003年

SORA 3号

晴夜 (3) | 3

柴田 佐知子

蛸壺に蛸の丸寝や星強し

潮焼けの腕もて運ぶ夏料理

むにやむにやと動く赤子や巴旦杏

あと退りする穀象の干されをり

ずぶ濡れの女恐ろし葛の花

たわいなく落つる胡麻なりなほ叩く

稲光死人に口がまだありて

—「俳句」九月号より—

骨太く海女の老いたり草の花

浮 巢

遠 野 萌

菜の花や今日の不運はけふ忘れ

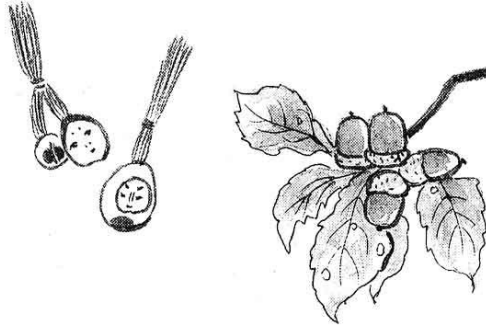
手に負へぬ蝌蚪を放ちて戻りけり

春雷や盆地にしづむ寺の塔

腹ばひの嬰の手足や夏来たる

十葉の増え安住の栖なり

嫌はれていよいよ長き青大将



雨のあと浮巢に花の流れきし

しやぼん玉吹きて分身ふやしをり

島のごと水田に浮かぶ墳蒼し

万緑の岡城址より合唱隊

去年より脚の伸びたる浴衣かな

熱帯の植物吹かれビヤガーデン

青簾巻くとき踵あらはなり

角出して戦ふ気なし蝸牛

山裾に牛のはりつく晩夏かな

父が逝く四、五年程前の実家での事である。話の途中で立った父が腕時計を持ってきた。もう三十年以上前、初任給で両親に時計とバッグを買ったその時の物だ。使わなくなっても大事に仕舞ってくれていたのが嬉しくて、貰って帰った。

これが形見として今、遺影の前に置いてある。ふと手にとつて見ると日付は十四日、奇しくも父の逝つた日である。手の中で急に秒針が動き出した。だがもう父の匂いはしなかった。きれいに拭いて写真の前に置いておこう。

ヨーロッパにて

中田みなみ

蜻蛉くるサンタルチアと言ふ駅に

ベニス

時計台曲みて恋の白夜かな

玄関に波のひた寄す星月夜

スペイン

彌撒の鐘ひびき渡れるホップ摘み

穂絮とぶ箒持つ婆黒づくめ

聖母祭壁に真赤な農夫帽



秋風や臘燭代は十ぺセタ

僧院に黙想の部屋野ばらの実

城砦の濡れのこりたる大花野

秋の薔薇ふと僧院の冬おもひ

霧灯る町に魔除けのナイフ買ふ

フランス

秋雨や曲真似叩く「ラベル」の扉

絵を買へりマロニエの実をポケットに

似顔絵とモデル見比べ暮早し

鳴く鶏の荷台走れる朝月夜

体力はまだあるつもりなのだが、万一

迷惑をかけてはという不安から、もう五年ほど海外へ行っていない。何処へ行っても二度と来られないと思うと、時には一行と離れて度胸よく歩き、じっくり観察し、凝視するので今も鮮明に泛かんでくる。カサレス（スペイン）の丘の古城の扉を開けたとたん、数百羽の鶏が放ち飼いされていて驚いたこと。

城砦の裾が昨夜の雨に濡れており、砲台跡に腰かけて麦笛を吹いてみたこと。

頭の隅であれもこれも句になるナ…と思ひながら。

夜の秋

青山 悠

梅天や纜投ぐる洞間ごゑ

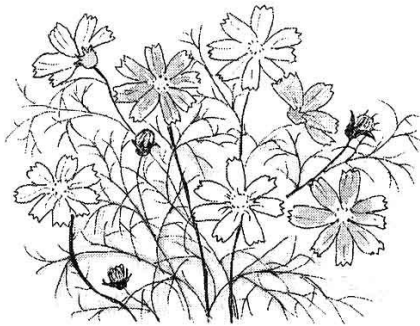
蟹路地にむかしの暗さ蟹走る

喜捨受くる僧に合掌朝曇

黒南風や巖のやうなる海人の顔

波乘りに新しき涛かむさり来

子育ての烏の殺気裏参道



クリークの風生臭し蛭蓆

石炭列車絶えしレールや夏雲雀

みほとけの朽ちて鬼相に炎暑来る

滝音の近づいてくる白脚絆

まむし酒効用縷々と説かれたる

門を出る僧の桐下駄夜の秋

果樹園の鉄柵高し夏の蝶

園児らの顎紐白き夏帽子

星まつり患者に交る医院長

人形浄瑠璃の太棹の音が聞こえると、幼い私は団扇を持って急いで隣家へ出かける。農家の広い庭で毎晩浄瑠璃芝居の稽古をしていた。

俄舞台の上段には見台を前に浄瑠璃を語る人。下段では、昼は畑仕事などで忙しいおじさん達が、一つの人形を三人でぎこちなく操っていた。

巡礼おつるが「父の名は」と問われて「阿波の十郎兵衛」、母の名は「お弓」、それではお前の名はと言われて、「あーい、おつると申します」と可愛い声で言うところを、醬油屋のいかついおじさんの猫撫で声が妙におかしかった。刈草を焚く蚊遣火の匂いと広い星空が美しかったことを覚えている。

先ごろ思いがけなく粕屋町の資料館で当時の操り人形が保存されているのを見て懐かしかった。

秋 千晴

ふらここにひとりつきりの空があり

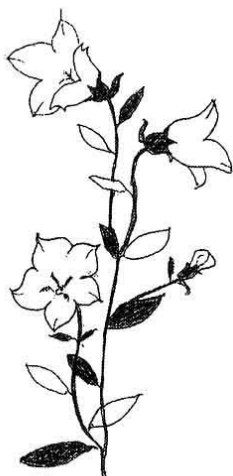
螢見に誘はれる日を待つてをり

正直な夫が育てし立葵

花菖蒲ときをり亀も泳ぎをり

闘牛の敵まちがへし酷暑かな

一日をもて余したり白丁花



揚羽蝶止まるところを探しをり

あらかぶの荒磯の色に釣られけり

青簾すこし風ある朝の茶事

羅の裾より風の立ちにけり

糊強き浴衣の母の背も伸びし

塀越しの話聞きゐる立葵

白黒をはつきりさせて竹を伐る

足の指下駄をはみ出す踊かな

水さげて黙礼かはす墓参かな

近頃アメリカのオレゴンあたりでは、

樹の上に家を建てるツリーハウスが流行しているらしい。すぐにトム・ソーヤの冒険を思い出した。住んでいる人は楽しんで見学に来る人も多いという。

ところが、よく見ると樹木に穴を開け家の支えに使っているので家の中を樹が通っている。生きている樹は大変な負担になっていると思う。床下から伸びてきた筈のために、床や屋根を外してやった良寛様の話とはちよつと違う。昔の話はいいなあとしみじみと思う今日この頃である。

裏庭の蜜柑の木が、髪切虫の幼虫にやられて枯れてしまった。切り倒すことも出来ず、今だに他の木と同様に水をかけている。



空作品Ⅱ

柴田佐知子選

三伏や鴨居をくぐる子の背丈
つま立ちて神の水替ゆ御祭風
一村をうちくぼめたるはたた神
突堤に集ふ島の子岩つばめ
屈託のしぶきを高く泳ぐなり
厄日過ぐ幹のなかばに海見えて
くれなるの山羊の乳房や夏の雲

高村
淳